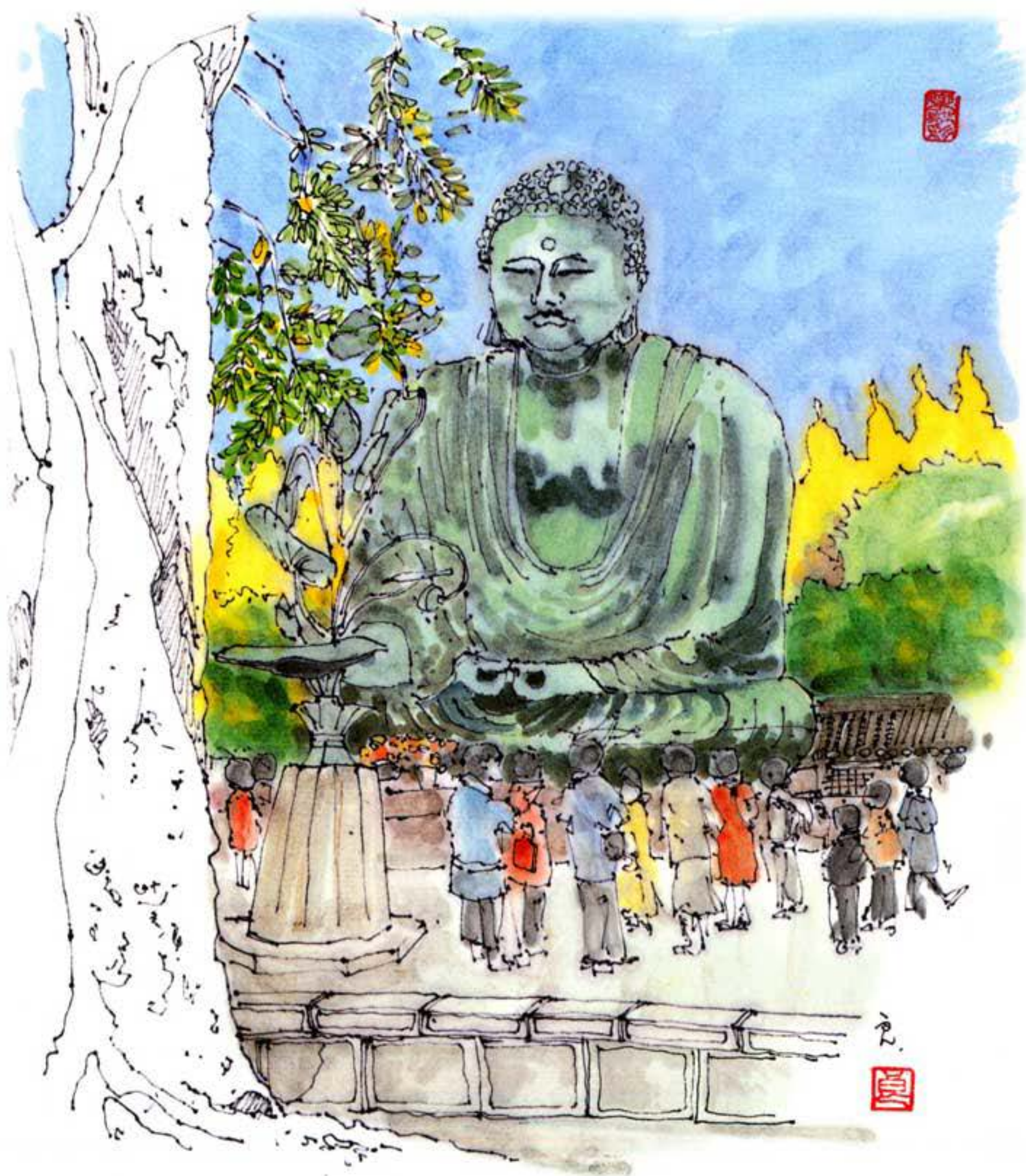


浄土

monthly
JŌDO

April 2007

4





東京・江戸川

金蔵寺

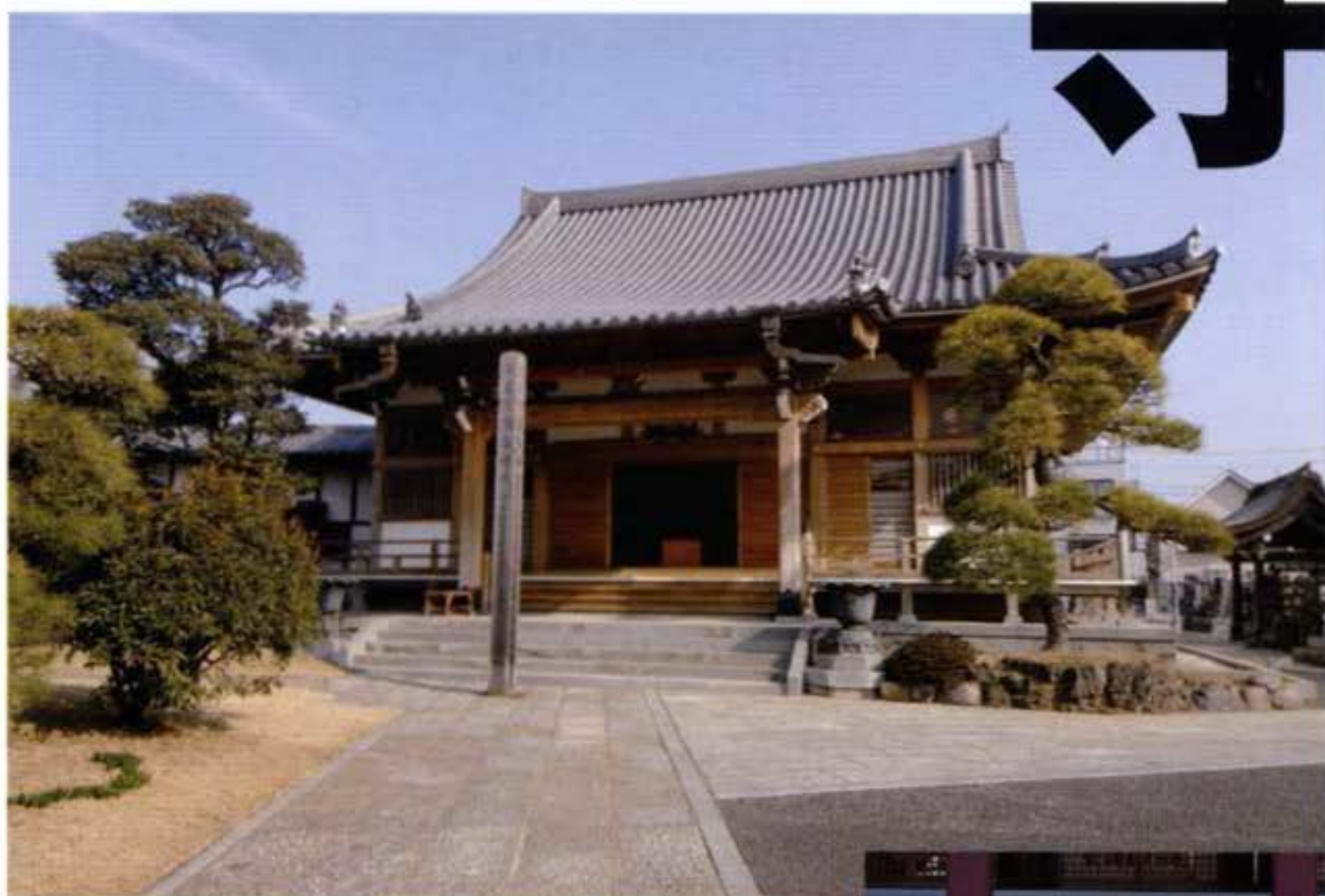
寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の

心の故郷を紀行する

寺院紀行



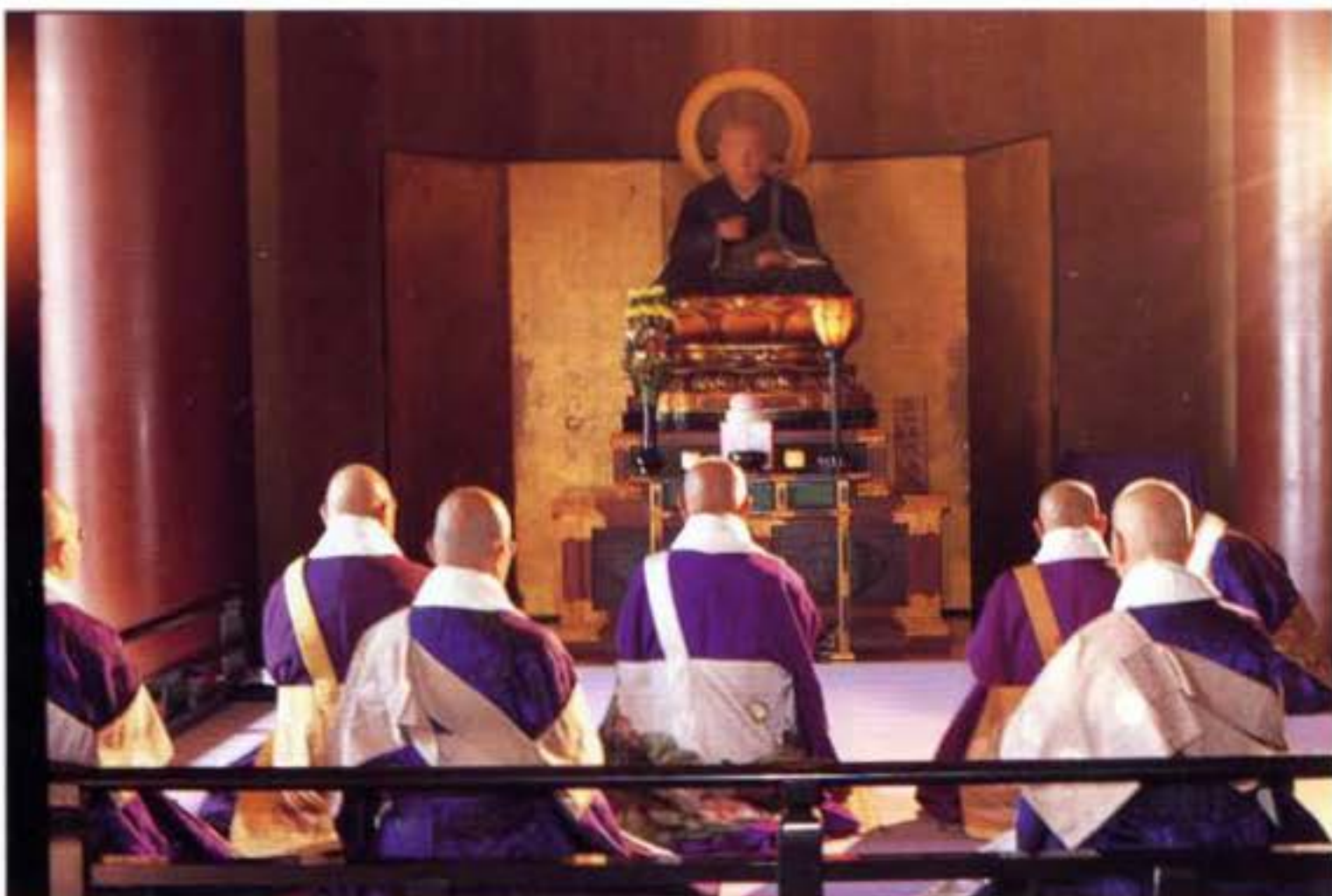
寶徳山松壽院金蔵寺本堂。右は中央が金蔵寺第三十八世荒木昌善前住職、向かって右から二番目が金蔵寺第三十九世荒木昌道住職、左から二番目が誠心寺荒木良道住職、左端が金蔵寺荒木信道副住職、右端が副住職の弟さんの荒木俊道師



金蔵寺本堂の内陣と本尊、木造阿弥陀如来立像。本尊は鎌倉期のヒノキ材割矧造で、左肩からの肩紐で吊るされた袈裟の作例は浄土宗の総本山の知恩院と同じ様式の奈良仏師の系統を引く像容の整った仏像だ



昨年十一月に京都知恩院から安置された法然上人の御身柄が納められた法然上人像に手を合わせる荒木昌善
前住職（中央）



平成十九年一月二十六日、荒木昌善前住職は御忌の唱導師の教書を大本山増上寺の本堂で伝達された



教書伝達式に列席された金蔵寺と有縁のみなさん。唱導師拜命はそのお寺の歴史に残る貴重な行事となる



金蔵寺の前を流れる江戸川。左側が
金蔵寺のある江戸川区で対岸は千葉
県の行徳になる



本堂に掛かる山号額は、書家でもある
荒木昌道住職の筆だ



赤ちゃんの登場で急遽撮影をお願い
した記念写真。左から荒木昌道住職、
荒木昌善前住職、ひざの上が荒木岳
道くん、荒木信道副住職

浄土

2007/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・江戸川 金蔵寺	写真=タカオカ邦彦	1
法然上人頌	佐藤春夫	6
花浄土	木村和恵	8
寺院紀行 東京・江戸川 金蔵寺	真山 剛	16
響流十方	林田康順	26
江戸を歩く	森 清鑑	30
会いたい人 笹野高史さん②	関 容子	38
表紙の言葉	桜井良夫	46
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人頌

佐藤春夫
作

光明は隈^{くま}なくそそぐ

限りなき 命に生きよ

人間の知恵^な勿^なたのみそ

み恵みは人を扱^{えら}ばず

ただ頼め阿弥陀^{ほとけ}仏と

おしえたる

いみじきよ

我らが祖師や

煩惱を絶てとは告^のらず

みだれたる心もゆるし

人間の性^{さが}のまにまに

み仏の国に往^ゆき生^いく

この道は誰かひらきし

なさけある

慕わしの

われらが祖師や

花 浄土

木村和恵



首都圏から約百キロ、埼玉県の西北部に位置する秩父地方は、古代より知々夫国ちおのくにとして、人々の営みのある地域として存在していた。奈良時代、この地から産出された銅は、和同開珎という、国産の銅銭を生み出した。帝は大いに喜び、年号を「和銅」へと改かえたと伝えられている。

四方八方、山また山の連なりは、まるで蓮の花弁のように、秩父盆地を包みこむ。神々が宿ると伝えられる峰々の稜線は、山里に影を落とし、ほの暗さのなかに、隠国こもりくとしての独特な景観をつくり、古来、聖地としてあがめられてきた。室町時代創設された、秩父三十四ヶ所の札所霊場は、西国三十三ヶ所、坂東三十三ヶ所と共に、日本百番札所霊場として、今尚、多くの人々の信仰の地として栄えている。特に江戸時代は、仏教の西方浄土思想により、江戸の地から西方にあたる秩父の札所は、大変賑わい、浅草寺や護国寺などで、江戸出開帳をするなど、江戸の庶民の間で札所巡りは大流行した。ちなみに、増上寺の地に、ホテル建設の折、動かされた大名家から徳川家に奉納された石の大灯籠の一部は秩父札所に移され現存しているが、こうした事にもなにか御縁を感じることである。

地域的には、日本列島の中心に近く、水源地でもある大地は、あまたの生き物を育み、わけでも植物の種類は豊富である。内陸性気候は、植物の北限南限地域にあたり、より複雑化し、地球上、ここにしか存在しない秩父岩桜など特种植物も数種あり、まさに花浄土の地でもある。

花の記憶

この地に生を享けた私は、幼い頃より植物に対し、異常な程に魅かれるものがあり、記憶の根底にある想いも、やはり花の記憶であり、私の物心は花から始まったと言っても過言ではない。

暗くて深い穴。小石を投げ込む人々。その上に咲くぼつてりとした紅色の八重桜の花。枝もたわわに咲き乱れる面影が、今も私の内で鮮烈に浮ぶ。それは三歳の記憶である。両親の仲人さんの葬儀の時の光景である。

薄紫色の花を、畔道^{あせ}にぎっしりと咲かせた鷺苔。一面真っ赤な絨毯を織りあげた落ち椿。ある日突然、溪谷沿いに、黄色の花が咲きこぼれるように咲く山吹などなど、野山を駆け巡り、花々と遊び戯れた少女は、あれから数十年、花の道を生業とし、今も花織り人として植物と共に過ごす日々である。自分にとって天性の仕事として……………。

二つの花祭り

花で風土を表現したいと考え、歴史、民俗行事など秩父学を学ぶなかで、花祭りと出会った。秩父地方では、五月八日を藤の節句と呼び、山の民は山入りをし取ってきた藤の花の枝を、玄関口などに飾る古い行事がある。この行事に月遅れのお釈迦様の誕生会



の花祭りが集合されたのが、秩父市吉田の花祭りである。（現在は五月四日に変更された。）五月三日の夜、摘まれた花は熊野神社に集められ、子供達は生の花を使つて、花御堂の屋根を葺き、その晩、子供は濃密な花の香りに包まれながらお籠りをする。翌朝、子供達は、手に手に花籠を持つて、裏山の米山薬師堂まで、参道を花びらでまき清めながら花御堂を運びあげる。花御堂を安置すると、残りの花を一斉に散華し子供達の役割は終わる。それから夕方までは、花の道を辿りお参りする大人達の行事となる。神仏混合、民俗行事との習合と複雑にからみあった、山里ならではの、ゆかしい行事である。県の民俗行事に指定され、年々大勢の見物人で賑わっている。

二十年程前、「とにかく、うちの寺の花祭りを見に来てください」と小鹿野町般若、法性寺（秩父札所三十二番霊場）の住職に誘われ、花祭りに参加した。丁度その頃、華道家としての自分に迷いがあり、悩んでいた時でもあり、その時の体験は私にとって重大な転期となった。

五月第二日曜日の朝、子供達は二、三時間かけて花を集める。ルールは二つ。花だけつまむ、昼までに仕上げる。子供達は境内を、花を求めて、まるで蝶のように、妖精のように花から花へ、山々を走り廻り籠いっぱい花を集め制作に励む。

「私も花御堂をつくってみたい！」わがままな私の願いを、住職は快く許してくださり、いつしか私も、童心に戻り花集めに走り廻り楽しい一時を過した。そして子供達とは別に、独りで、花御堂をつくった。

子供達の花御堂は、班ごとに、四面全く違う花曼陀羅図は、アンバランス美とでもいうべきか、不思議な調和を保ち、自由闊達な図柄は、年々変わるが、おおらかで魅力的

な味わいは変わらない美しさである。

私は打ち萎^{じし}れた。自分は花のプロであり、それなりの知識や技術もあったし、慢心していた。しかし無邪気な子供達の表現には、そんなちっぽけな作意など、吹き飛ばされてしまった。生き生きとした迫力と、華やかな息吹きに満ちあふれていた。秩序よく、小綺麗にまとめた私の花御堂は、美しいけれど、それ以上でもそれ以下でもない、平凡なものだった。この時初めて、花を生ける、本当の懐さと怖さを知った。あくまでも、子供達の自主性に任せた無欲な花御堂づくりの懐さを知った。以来私は、花御堂づくりは子供達にまかせて、サポーターに徹することにした。

山門から本堂までの石段に、残った花びらを散華し本堂に安置し、子供達の役割は終了する。毎年毎年子供達をつくる花御堂は、優劣つけがたく美しく花開き、巡礼さんにも、新たな歳時記として喜ばれている。



花散華

西暦二千年の春、私は人生の恩師と永遠の別れを迎えた。こよなく野の花を愛した師は、生前から、「葬儀の時は野の花で飾ってほしい……」と、春なら……夏なら……秋なら……と言われていた。そして師は、二輪草の花咲く春に、七十七歳の生涯をとじた。悲しくて悲しくて、涙で摘んだ数百本の二輪草で遺影を飾り見送った。

その日から一年間、一日一花を目標に師の供養の為に野の花の絵を描き続けた。あくる年の花祭りの前夜、住職の御厚意で、本堂にて師の為に花御堂をつくり、三百六十五枚の花の絵を散華して、私だけの一周忌の儀式をした。南の島の海に散骨し、戒名も残さなかった師。生まれて初めて経験した大切な人を見送る心の痛みは、花を描く事で次第にいやされた。花御堂を囲んだ花の絵の広がり、私にとってまさに花浄土だった。あの日、あ



の時の感動は言葉では表すことはできない。生涯一度の、この世ではありえない不思議な、凜とした甘露な花空間だった。

思えば幼い頃から、私の花の記憶は、死と隣り合わせだった。それは悲しさだけでなく、むしろ希望にもいた祈りであった。昔から人は死んで花になる。そんな言い伝えのように、人の魂は花になって蘇えるのではないか。二輪草の花が咲く度に、師の面影が忍ばれて、師の魂は二輪草に宿っていると、実感できるこの頃である。貴重な体験をさせていただけた事に感謝感謝である。

花遍路

古来日本では、仏教伝来以前から、卯月八日に、花を祈りの依代^{よいしろ}として祝う行事があり、西日本では、桜、桃、椿などの春の花を束ねて、竹箒^{たかほう}のようにして天にあげる天道花とか、苗代の水口に卯の花を飾したり、豊作の予祝としての花見行事など、神事として花を愛でていた。花を愛でる大和心は、仏教の発展と共に、華道、茶道、香道などの文化を生み出した。

草木仏心という言葉があるように、草木に仏の心が宿り、雑華^{ぞうか}莊嚴^{そうごん}すべての花は極楽





木村和恵（花織り人・銘仙語り部）
埼玉県秩父市生まれ、在住。
NPOちちぶまちづくり工房副代表、
知々布・織女の塾長。
花織り人として、自然を手本に季節
感を重んじた花教室「華工房」を主
宰。
銘仙着物の語り部として講演会、展
示会などイベントを企画運営し、銘
仙文化を後世に伝えるべく活動中。

著書

「秩父の野の花めぐり」文化出版局
「銘仙・大正、昭和のおしゃれ着物」
平凡社
「野の花づくし春・夏」講談社
雑誌等に紹介記事多数。

浄土に花開くという考え方に感銘を受けた。私は今、祈りと感謝の為に花を生ける事に喜びを感じている。あるがまま、なすがまま、植物の持つ姿をそのままに、自然を師として、型にこだわることのない花をめざし、花を通じて心を織りあげる、花織り人として過ごしている。花祭りの日を、慢心する心をいましめる、花供養の日と定め、子供達と過ごせる花祭り、今年はどんな花御堂ができるやら、思いはせながら楽しみにしている。十代には十代の七十代には七十代の華がある。人生と共にある花を咲かせたいと願っている。花に生き、花に生かされての私の花遍路の旅は、まだまだ始まったばかりである。生命ある限り、花浄土をめざして歩み続けてゆきたいと思う。

寺院紀行

東京・江戸川

金蔵寺

撮影／タ力才力邦彦

文／真山剛



大本山増上寺本堂での教書伝達式。
中央の荒木昌善金蔵寺前住職が四月六日の御忌唱導師を務められる

本誌四月号の寺院紀行は恒例のように、毎年大本山増上寺で四月初旬に行われる御忌法要の唱導師を勤める寺院に登場していただいている。

御忌法要とは浄土宗の宗祖である法然上人の年忌法要のことです。大本山増上寺では四月の初めに約一週間かけて行われる増上寺で最も大きな法要で今年が七百九十六回目にあたる。

さて、この法要、例年だと満開の桜に見守られることが多いのですが、今年は記録的な暖冬で葉桜の下での法要となりそうだが、桜の咲き具合はともかく今年は例年とは違う大変意義深い大本山増上寺の御忌法要なのである。

というのは、平成十八年十一月二十五日に増上寺に法然上人の御身柄が安置されてから最初の御忌法要だからである。

法然上人は長承二年（一一三三）、岡山で生まれ、比叡山で修行し、京都東山の麓に庵を構え、根を張ったようにその地で人々に教えを広めたという。晩年に流罪となり四国に流されたが、八十年の生涯を通じての足跡は京都を中心に西にしか残っていない。それが昨年始めて箱根の山を越え東にお越しになったのである。もちろん上人がお越しになるわけはなく、浄土宗総本山知恩院にある法然上人のお墓、御廟の、もう土や砂にかえっているであろう御遺骨がお越しになったのである。これを西の知恩院では浄砂と呼び、東の増



金蔵寺は江戸川沿いにある古刹で、葛西、行徳の二領の寺院をまとめる役を果たした由緒ある寺院だ

上寺では御身柄と呼んでいるのだそうだが、どう呼ぶかはともかく、法然上人が東漸し、東の浄土宗大本山増上寺に納められたのである。これは浄土宗の歴史に残る大きな出来事であった。

この宗祖東漸を先頭に立って推進されたのが、本紙一月号のこの寺院紀行にご登場いただいた江口定信増上寺執事長なのだが、残念ながらことに昨年末、病で遷化されてしまった。その江口執事長が御身柄を迎えたお待ち受けの法要で締めくくりのご挨拶をされたのだが、その途中、執事長の声が曇られ、涙声にまでなされた。本堂内には関東はもちろん、東北、北海道から何人もの僧侶が参集していたが、執事長の感動が堂内に染み渡ったという。その御身柄が納められた法然上人像の前で始めて上人の徳を讃えられるのが、今年選ばれた三人の唱導師なのである。

その一人が東京は江戸川、金蔵寺の荒木昌善前住職である。

縁というのは不思議なものだが、法然上人御身柄のお待ち受け法要の中での唱礼、法然上人のお名前を独唱するのだが、その唱礼を荒木昌善前住職のお孫さん、金蔵寺の荒木信道副住職が務めていたというのである。

「実は以前、江東組の組長時代に唱導師のお話をいただいたのですが、当時はちょうど本堂再建の最中だったこともあり、お断りさせていただけなのです。それが今度は思いもよらぬことから、お声を



金蔵寺本堂は平成七年、前住職時代に建立された。昭和十二年に建てられた間口四間半、奥行五間本堂は七間四面の伽藍に生まれ変わった

かけていただきました。高齢のため不安もありましたが、ありがたい仏縁と思い、お引き受けさせていただきました」。

しかし、こういうものは願っても叶うものではない。荒木前住職の巡り合わせの強さを感じるのだが、お話を聞くとその仏との強い縁は持って生まれたものようである。

大正十四年五月、愛知県名古屋の近くの津島の自作農の次男として荒木前住職は生まれた。男四人、女二人の六人兄弟。小さい頃から喜んで農家の手伝いしていた四歳年上の長男を見ていて、次男は小学校四年生の頃には、この家に自分の居場所はないと感じていたという。そして小学校を卒業後はどこかの饅頭屋か呉服店にでも小僧に出してもらおうと心に決めていたそうだ。

その想いを卒業時に告げると、両親は小学校卒業だけで小僧に出すのはと、親戚の尼僧さんに頼んでお寺に出すことにしたという。「その時は外に出してもらえれば良かっただけで、どこに出された」ということは言いませんでしたね（笑）」

そして、子供ながらに自らの意志で家を出て、近隣の善應寺という浄土宗のお寺に入った。住職は角田俊善師、十人ほどの弟子達と一緒に、お寺を守っていた独身の住職で、この住職のもと、荒木昌善前住職の僧侶としての人生が始まったのである。

最初の一年は掃除、洗濯、炊事に明け暮れた。しかし二年目から



本堂裏手にある金蔵寺歴代住職の墓。現住職はすでに第三十九世と代を重ねている

は中学校に通わせてもらい、中学卒業後には佛教専門学校、今の佛教大学にまで通わせてもらった。

が、時まさに戦中、昭和十七年の九月には半年繰り上げの卒業となり、すぐ岐阜の陸軍歩兵隊に入隊する。以後、愛知、千葉、鹿児島、埼玉……と移るが、荒木前住職の強運を物語るのが、沖縄は名護湾への魚雷攻撃である。

飛行機の操縦は中隊長、進路を指示する航法という役目で荒木昌善前住職が頭部座席に乗り込み宮崎から暗闇の中に飛び立った。敵に気づかれないよう三々五々離陸し爆撃をして引き返す作戦だった。荒木前住職の機は攻撃には成功したものの、闇夜での帰還の途中に米軍機の戦闘機に追われることになる。が、的確な進路と飛行時間の指示、そして中隊長の急降下で辛くも逃れたのだが、無事帰還できたのは荒木前住職の一機だけだったという。その後も数回の飛行でこの二人は命運をともしたそうだが、中隊長から「鈴木(旧姓)、お前は俺の機以外には乗るな」とまで言われたという。

任務遂行の的確さと判断力、それに僧侶ということもあったかも知れないが、荒木前住職は信頼というかけがえのない人と人の結びつきを戦争で教えられたという。

終戦は茨城県沖からの米軍上陸に備えて赴任していた埼玉の児玉で迎えた。戦後すぐ善應寺に戻るも住職はすでに遷化していて、仕



金蔵寺の寺宝の大数珠と涅槃図。数珠には増上寺大僧正哲堂の銘が刻んである

方なく実家に戻ると、しばらくして長兄、三男、四男も戦争から無事復員してきた。

「檀家さんの中には息子を三人とも戦争で亡くした人もいますから、うちは本当に運が良かったのでしょね」

戻る寺が無くなった荒木前住職だが、無事復員した上に僧侶の資格をもっている青年には、あちこちから声がかかった。

「佛専時代にお世話になった京都のお寺、恩師が紹介してくれた奈良のお寺、そして東京の東小松川の源法寺に入っていた善應寺時代の兄弟子からの誘い。どれも有り難い限りでしたが、最終的には兄弟子に勧められたこの金蔵寺に入りました」

金蔵寺の当時の住職は荒木大禅師。その娘婿として昭和二十年に養子に入り、翌二十一年には金蔵寺の元末寺で大禅師が兼務していた誠心寺の住職になる。当時の檀家数は金蔵寺百余軒、誠心寺五十軒。決して大きな寺ではないが、寺領の田んぼがあり、年貢米で生活の心配はなかったという。

確かに復員した青年は少なく、とても貴重な存在だったに違いないが、すぐにお寺に入り、結婚をし、住職となり、食うに困らなかったというのだから、これは恵まれている。また、どのお寺を選んでいたとしてもそれなりの僧侶人生を過ごされたに違いないが、金蔵寺に落ち着いたのも仏縁なのだろう。

しかし、農地解放で金蔵寺も他のお寺同様、寺領を失う。生活の糧を失った上に、荒木前住職にはもうすぐ子供、現住職が生まれることもあり、すぐに就職先を探したという。

「いま思えば無鉄砲でしたが、いきなり法務省に行って雇ってくれ、と言ったのです。すると、じゃ少年審判所に行きなさい、って。で、その足で少年審判所に行くと、じゃ明日から来なさい、って。明日は無理だから明後日からいいですか、と千駄ヶ谷に二日後から通うことになったのです」

これも運がいい。

昭和二十一年から一年勤務したが、近所の先生の薦めで教員試験を受けるとこれまた一回で合格。少年審判所を辞め昭和五十七年の定年まで三十五年間続く都立高校での教員生活が始まり、少年審判所の関係から保護司にも若くして就任し、五十年以上務められた。

また、教員生活に慣れ始めた昭和二十五年には師の大禅師が遷化され、二つのお寺を守ることとなり、教員との二股ながら金蔵寺を守り続けたが、時はくんだり、平成七年には新本堂を建立された。

この本堂建立にもエピソードがあり、近隣のお寺を建てた大工さんの仕事ぶりがとても気に入り、自分の本堂建立を即決。師の大禅師が昭和十二年に苦勞した建てた本堂を、七間四面の立派な伽藍として再建されたのである。そして新本堂落慶の翌平成八年には住職



本堂脇に祀られている六地藏。古い六地藏ともどもお参りの方々の幸せを願われている

を長男昌道師に無事譲られた。さらに昨年には曾孫さんも誕生された。昌道住職の長男、信道副住職の長男で岳道君だ。もちろん外からではわからない苦勞も少なくなかっただろうが、恵まれた人生を過ごされてきたように見える。

さて、お寺の紹介が遅れてしまったが、金蔵寺は前述したように、かつては五、六か寺の末寺をもつ、葛西、行徳二領のリーダー的寺院だった。その創建は定かではないが、開山の覺順上人が応永二十二年（一四一五）に遷化していることから創建は室町時代で、千三百年代とも考えられる。たとえ千四百年代にしても江戸時代創建の寺が多い東京では古刹である。

寺伝では覺順上人は増上寺を開山した聖聰上人のもとで仏門に入り、この地に草庵を結んだとされている。そして本堂が建立され、寶徳山松壽院金蔵寺と称したのは第六世白道上人の時で、寶徳二年（一四五〇）だったことから、山号はその年号の寶徳山となっている。創建の古さに加え、さらに驚くのは金蔵寺寺宝の本尊の木造阿彌陀如来立像で、金蔵寺の開山を遡る鎌倉時代前期のものだという。造りは鎌倉期のヒノキ材割矧造で、左肩からの肩紐で吊るされた袈裟の作例は浄土宗の総本山の知恩院、比叡山延暦寺、奈良県西方寺の快慶作などと同じ様式という古仏で、奈良仏師の系統を引く像容の整った仏像として平成九年には江戸川区指定文化財になった。



江戸時代から残る古い六地藏

歴代住職で有名な方は、明治から大正にかけて仏教儀式の第一人者だ興世隆眞上人で、いくつかの名刹の住持をしたあと、最後にこの金蔵寺に入り第三十六世としてここで遷化されている。

さて、こうした寺史をお話しいただいたのは、金蔵寺第三十九世の荒木昌道住職だが、江戸時代創建の寺院は住職がおおよそ二十五世前後だから、やはりこの第三十九世にも驚かされる。この古刹を守られている昌道住職は昌善前住職の長男だが、大正大学史学科卒であるが籍を置いた書道研究部以来、筆を離すことなく、平成十六年には銀座で個展を開かれている。

「荒木大樹書展——報恩・感謝の心をこめて——」と題した三十点の作品は浄土三部経を中心にしたもので、日頃称えられているお経、念仏、そして法然上人の言葉などである。また書家として浄土宗芸術家協会にも所属されていて、事務局次長として会の世話をしながら、美術展に毎回出品し、この二月には所属している貞香会の理事長にも就任している。ちなみに金蔵寺本堂にかかる山号額は住職の筆である。

そして先代住職同様、中学校の社会の先生をされていた。ちなみに住職の奥様も浄土宗芸術家協会の会員で、詠唱の先生として増上寺吉水講などで指導されている。

さて、取材の最後に顔を見せてくれたのが、副住職の長男である

岳道くんだった。去年の九月生まれで、しっかり見開いた綺麗な目の、意志の強そうな可愛い男の子だ。その岳道くんがお父さんからおじいちゃん、そしてひいおじいちゃんへの膝の上へと抱えられていく。親子四代が揃う珍しい光景に思わず写真のお願いをした。すると、親子四代の普段着を住職の奥様が気にされた。奥様が笑いながら言うには、「うちはみんな改良服しか似合わない、って言われるんですよ」ということだった。そこで、岳道くんがお昼寝に入る前にと、急いで作務衣を羽織っていただいた。

撮影中にひいおじいちゃん、荒木前住職が目細めて言った。

「いずれこのひ孫がこの金蔵寺を継いでくれるかもしれません」

岳道くんは金蔵寺第四十一世ということになることを、金蔵寺の本尊、阿弥陀如来も望まれているに違いない。そしていつか金蔵寺の法灯を継ぐ時に、曾祖父が増上寺で御忌の唱導師を務めたことを、そして、自分もお稚児さんで列に加わったことを嬉しく、そして誇りに思うに違いない。

(ルポライター)



金蔵寺から江戸川方向にある八雲神社。この神社も金蔵寺と同じ祇園守紋である

われとはげみて念仏申して、いそぎ極樂へまいりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、心のままに迎えとらんとするべきにて候なり。

（『往生浄土用心』）

自らお念仏に励んで、この世での命が尽きた後は一刻も早くお浄土へ往生して、種々の妙なる力を身につけて、再びこの娑婆世界に還り来て、迷いの世界で生まれかわり死にかわりを繰り返している人々にお念仏の教えを弘め、ご両親やお世話になった方々がおられる場所を訪ねて、思うがままにお迎えしようと思ふべきです。

還相回向——わが親のもと、わが子のもと、お世話になった方々のもとへ——

宗教系新聞の社説（『中外日報』一月二五日号）を通じ、一月二十日、全国紙数紙に掲載された型破りな死亡広告が業界で話題になっていることを知り、早速、全国主要紙を調べてみたところ、読売・朝日・毎日各紙の朝刊社会面に二段一〇センチ幅で掲載されているのを見つけました。この死亡広告は「私共の夫であり、父であるA（記事には本名が記されています）が二〇〇六年一月三十一日に亡くなりましたので、お知らせいたします。本人の遺言状による強い希望で葬式等は執り行わず、本状にて失礼いたします」というAさんのご夫と娘さんの挨拶の後、次のようなAさんの遺言が続いています。

私は一九四二年七月一六日に大阪で誕生以来六〇有余年の人生を終えることになりました。その間、各年代毎に多くの方々にご支援いただきありがとうございました。（中略）私は元々神の存在を信じておりません。そのような者が死んだ時だけ宗教に色どられた形式的なふるまいをするのは、理にかなっておりません。ひょっとしたら、私が亡くなればこの宇宙全体も無くなるのではと思ったりしております。万一、皆様の存在が残る場合には、有意義な人生をすごされるよう願っております。私自身の葬式等一切の形式的な事はしないよう、また、遺骨等を残さないように家族の

者に遺言してありますので、ご理解下さい。そのような訳でお香典などは固くお断り申し上げます。もし、私に好意を持っていて下さった方々にお願ひできるものでしたら、妻〇〇、娘〇〇に私とのお付き合いがどのようなであったかなどを書いた手紙を送ってやっていただければ、この上もない幸いです。娘も、父がどのような人間であったか、理解してくれるでしょう。短くもあり長くもあった私の人生でしたが、ありがとうございました。

この死亡広告からは、Aさんの揺るぎない意志とその思いを何とかして叶えようとされたご夫人と娘さんの素晴らしい実行力、そして、何よりも強い信頼関係で結ばれたAさんご家族の深い愛情を感じ取ることができます。優しいご家族に看取られて最期を迎えられたAさんは、きっとおだやかな心で旅立たれたことでしょう。

ところで、ここで紹介したAさんに限らず、近年、無神論・無宗教を理由に葬儀などの宗教儀礼を行わない方々が少しずつ増えているようです。こうした傾向を目にし、耳にするにつけ、浄土宗僧侶である私が、自戒と反省を込めて考えると、ころがあります。それは、「自分は無神論・無宗教である」と口にされる程に多くの人々を追い詰めてしまった理由の一端は、私たち僧侶をはじめ、

広く宗教を伝えてきた者たちの言動に求められるのではないかということ
 す。何故なら、無宗教を標榜する方々の多くが受け止めている「宗教」とは、
 ○○教や△△宗といった個別・具体的な教義やその教団組織に他ならないから
 です。そして、その淵源を遡れば、愛しい方との今生の別れを万感の思いで迎
 える人々や大切な方の遺体に取りすがり号泣している人々の心底を汲み取ろう
 とする努力を怠り、特定の教団組織の中だけで高邁な理論や深淵な哲学的思索
 に明け暮れてきた営為にこそ辿り着くのではないのでしょうか。このままの状態
 を放置し、今まさに死に逝く人々とそのご家族にこそしつかりと目を向けなけ
 れば、ますます人々の心は「宗教」から離れていってしまうような気がします。
 Aさんの遺書の行間とそこご家族の尽力の裏に、Aさん亡き後もご家族の心
 と心のふれあいをいついつまでも大切にしていきたいという、何よりも素朴な
 宗教的な思いを読み取ってしまうのは私の不遜でありましょうか。そして、私
 たちのこの世での命が尽きた後も「わが親のもと、わが子のもと、お世話にな
 った方々のもとへ還っても構わないんだよ」と、この上もない優しいお言葉を
 遺された法然上人こそ、そうした素朴な視点に立って、根本から仏教の構造を
 見つめ直そうとされたお方に他ならないのです。

合掌（林田康順）

江戸を歩く

第五回

大江戸ウォーカー
森清鑑

東禅寺

常光寺からは高輪北町の民家が連なる。家並みが途切れると、東禅寺の表参道。街道に面した総門を潜ると、広い参道と松並木。山門まで遠い（この参道は現在の第一京浜から入る広い道と全く同じ地形である）。横長方形の広い境内の先に本堂と方丈。左奥の山間には多数の塔中が並ぶ。寺社の背後は、山に囲まれている。臨済宗別格本山。寛永十三年（一六三六）、赤坂から移転。安政六年（一八五九）から明治六年（一八七三）までの十四年間、イギリス公使館として使われていた。公使オールコックが最初に赴任した処である。眼前に江戸湾が広がることから「海上禅林」とも云われた。現在の門から右に曲がりくねって桂坂に至る急峻な山道は洞坂ほらさかといい、江戸湾の眺望に目も眩む風景であった。この寺には、田村右京大夫の墓がある。近隣の泉岳寺に浅野内匠頭が眠り、くしき縁では



◆東禅寺

ある。当寺も幕末の動乱で水戸浪士襲撃事件など幾多の歴史の舞台となっている。

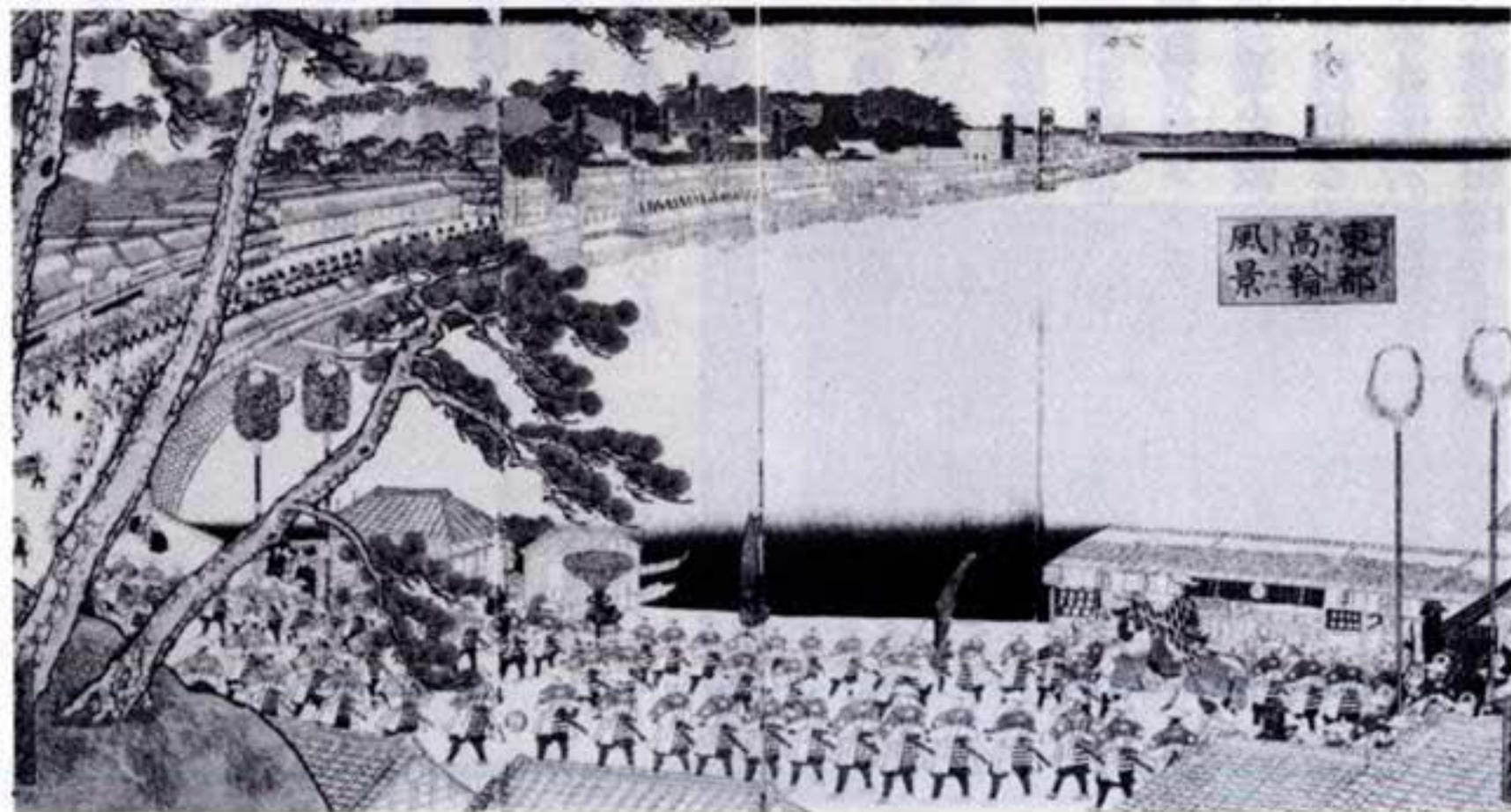
街道に戻る。高輪中町。そして薩摩藩中屋敷。街道に面して掘り割り、海縁^{うみべり}には薩摩藩揚場がある。敷地約一万五千坪。(品川駅に近い、さくら坂から駅中央出口の柘榴坂までをそのまま坂上まで迫り上げた立て長方形の土地で、ホテル・パシフィック東京、さくらタワー、新高輪プリンスホテルが含まれる。品川駅、線路は海)。薩摩藩屋敷塀を過ぎると高輪南町に入る(品川駅前から南)。民家の後ろに南町鎮守の高山稲荷。長い石段を登り、丘陵の頂に鎮座。眼下に広がる美しい海の眺望。房総から来る帆立船の格好の目印になったといわれる。

八つ山

賑わう町並みの先には、尖った八つ山が迫る。街道は八つ山を右に見て、山の麓、海沿いを巻き、品川宿に入る。この山は、一里塚



◆広重「高輪月の岬」嘉永三年 左に八つ山、下が東海道品川宿、前方が高輪の風景。



◆貞秀「東都高輪風景」文久三年 大名行列が品川宿を出て、高輪方面に向かう。左が八つ山。遠く札の辻まで見える。

を大きくしたような形状のため、旅人は、遠くから「あそこが品川宿」と確認できた。（その位置は、現在の八つ山橋から新八つ山橋にかけて。第一京浜を挟んで向かいの小高い森の丘も含まれていたと思われる。ここは伊藤博文が住み、後に岩崎邸となり、今、三菱地所開東閣）山からの眺望は正に絶景で、眼下に東海道品川宿、海、これまで歩いてきた高輪街道沿いの弧を描く景色が展開する。広重、北斎など多くの画家がこの景色を描いている。ここから増上寺の五重塔も望めたに相違ない。

御殿山

八つ山に続いて御殿山丘陵が南に連なる。御殿山は、現代では、跡形もなく姿を消し、地名のみとなってしまうたが、江戸屈指の景勝地であった。丘陵は、JR線路を縦中軸とし、大きな縦楕円形を描き目黒川まで続く。その南半分（権現山公園から目黒川）が東海

寺であった。新八つ橋辺りから中央の北半分が江戸時代の御殿山。太田道灌は江戸城を築く前にここに館を構えていたといわれる。だが名称の由来は、家康が、江戸入府後まもなく、この山に御殿つまり別邸（品川御殿）を造ったことに始まる（北品川三丁目）。当初、淀君を人質として置く、目論見があったといわれる。その後、鷹狩りの際などに歴代の將軍が頻繁に来遊。家光が沢庵、小堀遠州らと茶席を設けたことが伝えられている。しかし、元禄十五年の大火で焼失。その後、御殿は再築されなかった。八代吉宗はこの山に吉野桜を植え、以来、桜の名所として、江戸庶民、最高の物見遊山の場となった。広重は「御殿山遊興」、北斎は「御殿山の富士」を描き、あまた多くの絵師の格好の題材となっていた。花見を楽しむ庶民、武士。幕を張り、ごさを敷き、呑み、食す。踊る。現代と同じである。眼下に品川の宿。寺社、家々の屋根。目線は海の広がりをとらえる。帆立船が行き



◆「御殿山花見」江戸名所図会

交い、海鳥が乱舞。南は三浦半島まで見え、その中央に瀟洒な富士の姿が控えていた。

御殿山の景色は、春だけではない。享保の頃には、深紅に染まる櫨の木を多く植えたので晩秋の紅葉も景観の彩りを添えた。また、御殿山北の畑には松の太木が聳えていた。これを鐘鑄の松といい、ここで増上寺の大鐘を鑄たという。その記念に植えられた松である。

茶人大名として知られる、出雲藩七代目藩主松平出羽守治郷、不昧公（「浄土」出雲紀行二〇〇六年六、七・八月号に記載）が五十才で隠居、北品川御殿山の一角に有名な「大崎庭園」を作ったのが文化三年のことである。敷地二万坪。その位置は、現在のソニー本社辺りから海に向かって右手御殿山をかすめて八つ山の方角一帯であつたと思われる。大崎下屋敷から幕府拝領の土地を借り受けての一大庭園であつた。「大自然の中に散在する四カ所の東屋、十一カ所の草庵。茫々たる江戸湾、浜沿いに走る白帆船を背景に、

自然の頂上には十五カ所もの茶屋、東屋が点在していた。不昧が最も愛した茶室が「独楽庵」で元は千利休が作ったもの。緒方光琳の手を経て、荒廃寸前の茶室を建て直す。国宝級の茶器・茶道具五百余点。庭園は小堀遠州に学び、不昧が徹底的にわび、さびの美を追求した、希に見る一大美術園であつた。不昧の死後、松平定信は隠居し、楽翁となり、この大崎庭園に谷文晁を連れ、彼に絵を描かせている」（真説松平不昧 長尾遼著 原書房）しかし、この庭園は歴史の荒波に飲み込まれる。三十年後の嘉永年間に黒船来航。そして江川太郎左右衛門指揮の下、江戸湾にお台場建設。御殿山は方々削られ、その土は海に持ち込まれた。品川宿の大横町通りはこの土を海に運んだ道であつた。

この時、泉岳寺近辺の小山も切り崩されている。かくて大崎庭園は全て取り壊され、こ



の工事のための陣屋となった。また、維新後、御殿山を真つ二つに割って鉄道が開設され、往時の御殿山は見る影もなくなった。

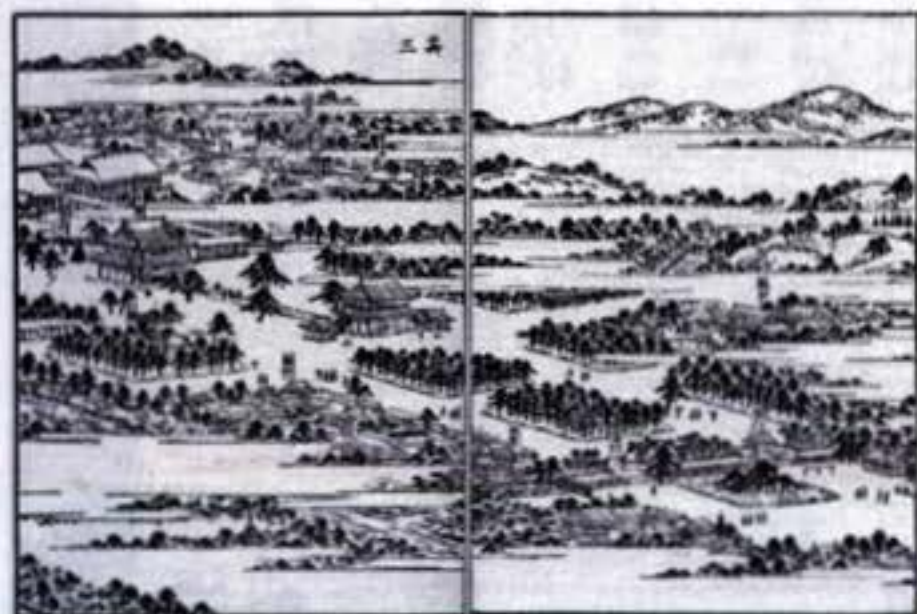
東海寺

御殿山丘陵の南半分、すなわち目黒川に至る約五万坪が東海寺（臨濟宗）であつた。江戸時代に戻って東海道から参詣してみたい。品川宿大横町を一步南に行つた歩行新宿^{かちしんじゆく}を御殿山の方に入る。すると山に並行して南北に走る広い参道に出る（今、第一京浜）。右手、山に向かつて迫り上がる森に牛頭天王社（品川明神社。現、品川神社）がある。そのまま進むと東海寺の中門。門を抜けると道の両側は東海寺門前町である。正方形の広場があり、西側の辺全部に額門、車門が並列に並ぶ。蛇行する目黒川に沿って東西は居木橋（現在地と同じ）まで。南北は、御殿山から目黒川までの広大な寺社の空間が広がる。大きな松林の段葛がいくつも配置され、左右は多数の塔

中。左側は目黒川に沿って瑞泉院、妙解院^{みょうげいん}、玄性院。右側は高源院、清徳寺。大きな山門を抜けると本堂（現代の品川小学校）。そして方丈。川沿い居木橋まで子院が囲み、北側、御殿山に向かつて東西に欲鳳池庭園（小堀遠州の作庭。現在、品川中学校）。その先、奥まつた、西側の一段と高い山の階段を登ると沢庵禅師が眠る墓地がある。

東海寺は、芝増上寺、上野寛永寺

に次ぐ江戸三大寺といわれた。規模もさることながら、將軍お声掛かりで創建された寺だったからである。三代將軍家光が京都から沢庵禅師を江戸に呼び、寛永十五年（一六三八）に建立したとある。工事に先立ち、將軍自ら、この風光明媚な品川の地を選び、沢庵を案内したというからその力の入れ方は尋常ではない。沢庵禅師とはどのようなお人であつたのであろうか。沢庵禅師、沢庵宗彭^{そうほう}は京都大徳



寺（臨濟宗）で第一座、百五十四世に登り詰めた人である。この時、朝廷から紫衣の着用を賜る。紫衣とは、紫色の法衣で、朝廷が宗派を問わず、古くから高德の僧に贈ったもので、その僧の尊さ、位の象徴であり、朝廷にとっては収入源の一つでもあった。しかし、幕府は朝廷がみだりに紫衣を授けることを禁じた。幕府の威光を示すためである。だが、後水尾天皇は従来通り、紫衣着用の勅許を与え続けた。これに対して、幕府は法度違反^{はつと}の紫衣を取り上げる強硬手段にでた。沢庵はこのことに反対し、たった三日で大徳寺の首座を降りてしまった。幕府にも屈しない、さりとて朝廷の威光を借りるでもない。彼は大阪堺和泉の名刹南宗寺に居を移し、その後、転々と地方の寺を復興していった。そんな折り、紫衣事件の断罪が下り、出羽に流された（山形県上山市）。そこでも彼は春雨庵を立て、悠々自適の生活を楽しむ。家光は側臣の柳生但馬守や天海和尚の直言に従い、京都二条城

で沢庵に会う。そしてその無欲で強い意志、深い学徳にすっかり参ってしまった。その場で沢庵の禁を解くと同時に、江戸に来てくれということになった。ここから東海寺が始まるのである。

沢庵は、若いときから柳生但馬守と親交があり、ある意味で二人は家光の政治論理を支えたのである。このような事実から吉川英治は、その著「宮本武蔵」で師匠沢庵に導かれる武蔵の姿を描いている。家光は沢庵を心の師とすると共に、沢庵の説く真理を実証したいがために、親しいが故の稚氣じみた行為を行っている。ある日、家光は朝鮮から虎を入れた。居並ぶ腕自慢を前にして、この虎の檻に入れと云う。日頃、大言壮語している家来も名指しされないように首を竦める。家光は辺りを見渡して、柳生但馬守を名指した。但馬は檻に入ると、裂帛の気合いで虎に迫った。虎に近づき、そのまま静かに下がった。虎は何も出来ず、射すくめられ、ただ座っているだけ

であつた。もう一人と家光の声。再び臣下は目を伏せた。意外にも呼ばれたのは沢庵だつた。彼は何事もなく立ち上がると数珠を手にさっさと檻に入った。虎の面前にいくと、頭を撫で始めた。虎は気持ちよさそうに、横になつた。沢庵はお腹を撫で、虎は益々気持ちよさそう。もうよかろう、彼は一言いうと、くるりと背中を回し、檻を出てきた。この光景を目の当たりにした家光は沢庵に尋ねた。「何故だ。平然と」。沢庵は答えた。「虎といえども仏性あり」と。もうひとつ。沢庵が毎晩酒盛りしているという噂が部下から家光に注進された。そこで沢庵を呼ぶ。「酒盛りしているとか」。「いや、大の好物です」と沢庵。「禅家は呑んではいけないのでは」と家光。それに答えて沢庵。「酒は口で呑んでおりませんが、心では呑んでおりません」。「それならば、折良く、良い酒がある。呑め」と家光。酒は一升五合の大杯になみなみと注がれている。すると、沢庵は「これほど有り難い酒は

ない」と一言。ふっと泡を吹飛ばすとぐいぐいと飲み干した。その時、腰抜かすような凄いい音。沢庵何事もなかったかのように「うまい酒でした」。時に「あの音は何ですか？」と沢庵。「あれは大砲の訓練」と家光。飲み終わつた沢庵。「エイ」と裂帛の気合い。家光思わず自分の杯を落とした。沢庵曰く「大砲は武門のならい。一喝は禅家ののならい。ちとご修業を」。そういう坊さんである。（中村天風著「心に成功の炎を」）

柳生但馬守は、柳生新陰流の創始者、父、石舟斎の菩提を弔うため大和柳生に芳徳寺を建立。開山は沢庵禅師であつた。現在も柳生家の菩提寺となっている。東海寺の奥まつた山に沢庵禅師の墓がある。文字通り、大きな沢庵石の質素な墓。この墓地には、賀茂真淵（江戸中期の国学者）、服部南郭（荻生徂徠の弟子で柳沢吉保に仕えた儒学者）、渋川春海（天文歴術、江戸の暦を作つた）といった江戸期の著名人の他、井上勝（初代鉄道頭）、

西村勝三（実業家）など明治初期に活躍した人物が眠っている。この小高い丘は正に絶景で下に目黒川が蛇行し、遠くに丹沢山系、そして富士山。「江戸名所図会」で長谷川雪旦は墓参に來た人達がお清めの酒肴をしている図を描いた。

額門から入って山門の左側に妙解院があった。細川二代藩主肥後守光尚が菩提寺として建立。以後維新に至るまでの熊本、細川家歴代藩主の墓がある。大名にふさわしい巨塔が立ち並ぶ、江戸期の数少ない典型的な大名墓地である（品川保健所隣）。細川ガラシャ夫人と夫、細川忠興以降の十六代に亘る、後継大名が眠っている。高輪泉岳寺裏の山、古鎌倉道に面し、大石内蔵助以下が切腹した細川藩中屋敷藩主末裔の墓である。

妙解院南に隣接し、目黒川までの玄性院が現代の東海禅寺で元禄期の造営奉行、堀田正盛の墓がある。この江戸期、玄性院前の目黒川、要津橋を渡ると再び寺社が広がる。橋の

目黒川沿いが清光院で東海寺の分院であった。ここに福沢諭吉が仕えた、中津藩奥平家歴代の墓地がある。これも細川家墓地と並ぶ大名墓地である。

明治に入って幕府の庇護を失った東海寺は、正に解体された。沢庵の墓地の上には新幹線が走り、背後はＪＲ各線。御殿山を貫いた鉄道が嘗ての東海寺をも貫いた。（つづく）

◆沢庵禅師の墓



◆細川家歴代の墓



◆中津藩歴代の墓



【参考文献】

「氷川清話 勝海舟自伝」勝部真長編 広池学園事業部

「江戸名所図会」上巻。斉藤幸雄等編

絵 長谷川雪旦、鈴木棠三、朝倉治彦

校注 角川書店。

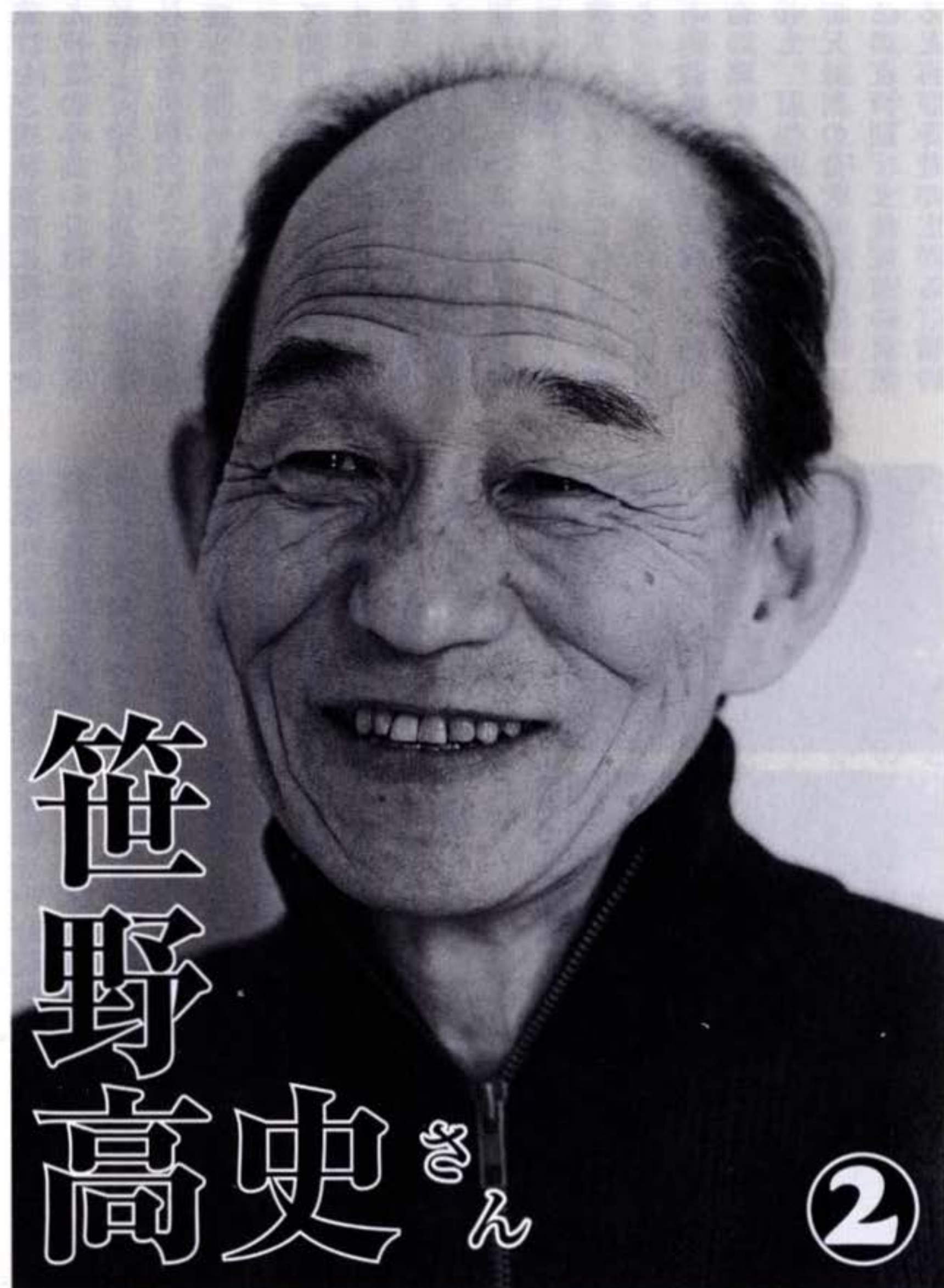
「広重の大江戸名所百景散歩」人文社「江戸・明治・東京

重ね地図」中川啓司編

「描かれた港区」補 東京都港区三田図書館

連 載

会いたい人 関 容子



笹野高史さん

2

笹野さんは日大在学中から自由劇場に通い、その芝居と串田和美、吉田日出子などに魅了されて、裏方を手伝ったりしていた。

一方、学生生活のほうは、学生が学校側に抗議して実力行使に及び、机や椅子を日頃の不満の鬱積のように積み上げて、大学を封鎖した。その二年後に70年安保を控えた時期だった。そのうち自由劇場も佐藤信や斎藤憐の「黒テント」に加わって反戦運動に強く関わるようになり、笹野さんは「日本に居場所がない」と感じ始める。

「二年生の夏に大学を中退しましてね。二十歳から一年半の間、貨物船の船乗りになったんです。外国へ行ける手段としても最適だし、兄なんかも船乗りになると言い出して、おふくろが嘆いたりしてたから、素敵な商売に思えたんじゃないでしょうか。横浜とか神戸とかから船出して、ひと月に一回帰ってくる外国航路です。香港、台湾、シンガポールなんという、花のロマンス航路、とわれわれ言

ってました。港々になじみの女の子は待ってるし（笑）。船が接岸すると電話線のスイッチが入るらしくて、すぐにジャンとかかる。すると、船長、バンス（前借り）おねがいします、ってね。ジャズマンばかりじゃなく、船乗りもバンスって言葉、使ってましたね」

しかし結局笹野さんは、芝居の世界に戻ってくる。

「串田さんに会ったら、またコツコツと始めるから一緒にやろうよ、と言われて、じゃ、今度はぼく役者で出ます、って。二十三歳にして俳優宣言したわけです。串田さんの周りにはいろんな面白い個性の人間が集ってきて柄本明も佐藤B作も自由劇場にいました。のちにB作さんはヴォードビルの世界を立ち上げるし、柄本も自分のやりたい芝居は違う、ということ『東京乾電池』を旗挙げするんですけど、とにかく当初は、ぼくなんか芝居のシの字も知りませんでしたからね。それが渋谷の幼稚園を借りた稽古場で、串田さんの

自由劇場「A列車で行こう」の舞台。柄本明、
ペンガル、高田純次、伊ッセー尾形などの顔
も見える。左端が笹野さん



指導でいきなりお客さんの前に立たされました。初舞台は『ヴォイツェク』（ゲオルク・ピュヒナー）の、主役じゃないですけどね。それでもぼくのやることはどこかおかしいらしくて、君はどうしてそんなおかしいことばかりやるの？ 浅草へ行けよ（笑）、って言われましたよ。そう言えばぼくは喜劇映画のジェリー・ルイスとかが好きでしたからね」

うまい役者というのは決して喜劇がうまいものだ。

笹野さんがあの渥美清さんと深い親交があった、という話は、笹野さんの芝居の質を浅草のコメディアン出身の渥美さんが気に入ったからに他ならないと思う。

「渥美さんがいろんな劇場を観て歩かれてるのは有名な話ですからね。あの狭苦しい自由劇場へもいらしてて、ぼくを知ってらしたんです。で、下北沢の本多劇場でしたかで、お

互いにお客同士で出会ったときに話しかけてくださって。それからというものは、柄本明も誘ってよく三人で連れ立っては芝居を観たり、一緒に遊んでくれましたね。ときどき電話がかかってくるんですよ。何か面白いのな？ って。すると三人でスケジュール合わせて、芝居観て、御飯食べて、いつも御馳走になるんですけど、いつお金払ってきたのかわからない。じゃ行こうか、ってその別れ際もみごとでね。タクシー拾いましょうか、いいのいいの、って、スーツと人ごみの中へ入って行っちゃう。ああいう紳士的なところ、粹なところ、実に素敵で、渥美さんはぼくの心の師ですね」

私も歌舞伎座の客席で何度も渥美清さんの姿を見かけたことがあった。いつも一人で、一階後方の片隅にひっそりと座り、誰も気易く声を掛けられない雰囲気漂わしていたような気がする。

「そんな感じ、ありましたね。ぼくらの芝居

1973年に佐藤B作が立ち上げた東京ボード
ヴィルショーの舞台でトランペットを吹く笹
野さん



も一人で観に来てくれて、周囲の目があるからわれわれは気を使うんですが、でも案じるまでもなく、パワーというか、自然のバリアがちゃんと出来てて、いやな感じを与えずに回りを拒絶してしまうんですね。エレベーターの中で一緒になった人なんか、アツと言っているんですけど、迂闊に肩なんかたたかせない、すごいものがありました。服装もごくごく目立たないようにして、野球帽を目深にかぶったりしてました」

渥美さんは芝居のセンスが抜群だった人だから、三人で観た芝居への批評はかなり手厳

しい面もあつたのではなからうか。

「そうですね。ジャン・ポール・ベルモントが芝居の『シラノ・ド・ベルジュラック』（エドモン・ロスタン）をフランスから引っさげてやって来たときに、行きましようよ、ってことになって、みんな期待して行つたんです。『勝手にしやがれ』とか、映画が面白かつたですからね。でも、一幕目の幕が降りたら、渥美さんがスツと立って、行こうか、って帰った。主催者は気にしたでしょうけど、ね、ポツカリ三つ空席になつたから。で、食事するところに落着いたら、いやあ、違つたねえ……って」

笹野さんにはいくつか演じてみたい役があるが、その中の一つが『シラノ』。

「ぼくは脇役で行くんだと決めてますから、そのときどきに与えられた役の色に染まつて行くわけですが、真似ごとでもいいからやりたいなと思つてるのが『シラノ』と『リア王』（シェイクスピア）です。『シラノ』の、一生

秘めた恋で、黙って死んで行くという美学。くもりのない性格の明快さ、爽快さは、イメージとして俺じゃないな、とは思いますがね。あの役は俳優を選ぶんだろうな、と思います」

それでジャン・ポール・ベルモントは『シラノ』とは違つた、という渥美評につながるのか。観劇のあとの食事の席ではどんな話題になるのだろう。

「とにかく面白い話を聞きたがるんです。一時渥美さんも船乗りになりたかつたことがあつたらしくて、よくそのころの話をしてくれ、と言われました。お目にかかるときは何か話を用意して行かないといけない。友だちでこんなバカなのがいた、とか、こんな芝居観て面白かつたとか。するとどこでやつてる？ っていうのに観にいらつしやるんですね。本当に片端から観て歩く。いろんな芝居観てもあんまり笑えないけど、藤山寛美さんのだけは心から笑える、アハハハって。他の芝居だと、

齒からもれる笑いしか出ない、って言うてらした」

笹野さんは『男はつらいよ』のシリーズにもずいぶんいろいろな役で出演している。

巡査、泥棒、車掌、旅館の番頭、市役所の職員、やくざの親分、そして傑作なのがおかまのオートバイライダーで、化粧した顔で寅さんの甥に迫る場面にはびっくりさせられた。

「『寅さん』には、第三十六作に下田の顔役の友だちで出たのが最初で、それからはいちよい出してもらってます。最近聞いた話によると、渥美さんが山田洋次監督に、面白い役者がいるよ、ってそれとなく推せんしてくださいってたみたいですね。やはり山田監督の作品に『キネマの天地』というのがあって、松竹蒲田時代の話で田中絹代さんも出演していらつしやるんですが、その中で渥美さんとぼくがずいぶんからむシーンがありました。

森の石松『三十石船』のパロディなんです、渥美さんの娘が映画女優になって、渥美さんはそれを反対してる親父さんなんですけど、娘の出てる映画のポスターが玄関に貼ってるんです。ぼくは、屑うゝい、お払い、お払い物はありませんか、って入って行って、ポスターを見て、あ、これ観てねえなあ。お前映画好きなのか？ 好き……かと訊くんですか？ 三度のメシより映画狂い、とか言っちゃって、いろいろ並べ立てると、お前詳しいな、女優じゃ今どうなのがいいの？ って訊かれる。自分の娘の名前がちつとも出てこないから、飲みな、こつち来て、って上からせて、誰か肝心なのを忘れてやしませんか？ あっ、いたいた、思い出した。有難え、思い出してくれたか。いいねえ、あの女優、一ぺんでいいから抱きしめたい、なんか言うと、コノヤロウ、って（笑）。そういうシーンを、いいねえ、面白いねえ、って渥美さんがとても面白がってくれたんで、それで山田監督が

ずいぶん認めてくださったんだと思いますね」

渥美さんが心を開いた、ごく限られた人数の中に笹野さんはいるわけだ。

「一緒にお風呂入ろう、とか言ってくれたりしましたよ。若いとき結核を患って、手術の傷跡があつて片肺でしたからね。気の毒で直視できませんでした。亡くなって、松竹で社葬をしたときに初めて御家族の方を見ました。奥さんの話もありませんでしたね。にごすのが男のたしなみ、みたいなところがあつて、浅草時代からの仲間の関敬六さんなんかもちろんと教えてくれなかったし、訊いちやいけない、っていう感じがありました。ぼくは田舎者ですからいろんなことがクリアにならないといやなほうなんです、独特の照れとかがあつて、なんでもアケスケにしない、って気持があつたんじゃないですかね。そういうのもいいな、って思いました。あとで聞くと、かなり親しいプロデューサーがお

宅まで車で送つても、必ず少し手前で降りて歩いて帰ったそうです。お宅を誰も知らなかったそうですね。ミステリアスというか、奥床しいというか、ぼくはいろんな意味で影響されることが多かったです」

渥美さんのお墓は都内のお寺にある。お墓参りも柄本さんと二人で行く、と聞いて、演劇行脚の黄門様と助さん格さんの図が浮んだ。

「アハハ そんな役どころだったかもしれない。緊張もしたけど、楽しいおつきあいでしたからね」
(つづく)

表紙の言葉

え
桜井良夫

4月

鎌倉

高德院

浄土宗高德院、大仏殿。

国宝阿弥陀如来坐像は多くの人々に親しまれている大仏さまです。だから大仏さんと呼びたい。この鎌倉の大仏さんは阿弥陀さま。女流歌人と謝野晶子はこれをお釈迦さまとして詠んでしまいました。有名な「鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におわす夏木立かな」の一首です。晶子の迂闊ではなく、この父性的な、あまりの親しみやすさのために奈良の大仏（毘盧遮那仏）と陰影を重ね、おおらかにのびのびと歌いあげた結果なのでしょう。小学校唱歌「鎌倉」の二番「極楽寺坂 越え行けば、長谷観音の堂近く 露坐の大仏おわします」の歌詞にも現れます。と、いうわけで、鎌倉大仏といえは全国津々浦々、知らない人がいないのです。知らない人がいないなどと簡単にいってみましたが、これは大変なことです。素晴らしいことです。ああ、それにしても大きい。

浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●白魚

〔特選〕白魚の絵皿に染まり動きいる

石原 新

おどり食いというのがある。生きているのを合わせ酢で食べるのだ。人間は残酷なものである。これもそれに類したものだろうか。皿に身の透いているのが可憐でもあるが、動きは必死である。

〔佳作〕白魚の椀の漆を泳ぎたる

千田 敏郎

白魚飯の淡きあり食すすむ

中島富士子

こぎつぱり白魚盛らん酔い浅し

鳥羽 梓

●草の芽

〔特選〕草芽萌ゆ上州はなお風強く

金谷 友江

上州といえは空つ風だろう。乾ききった関東平野を寒風が吹き抜けてゆく。草が芽ぐむようになつてきても、その勢いは衰える気配

も見せない。それでも春の来ている様子は、どこかに感じられるのである。

〔佳作〕草の芽や川滔々と村抜ける

石原 新

草の芽に煙草もみ消し漁師去る

浜口 佳春

草の芽や浄土の土の黒きこと

青山 亞子

●自由題

〔特選〕

七日粥野草海草取り混ぜて

山口 信子

七草もこの頃はパックに入れて売っているという。味気ない話であるが仕方あるまい。この句は、足りない分を海草に頼ったというのである。海辺に住む人の知恵である。中の句以下の表現はよくできている。

〔佳作〕春一日終え寝煙草という儀式

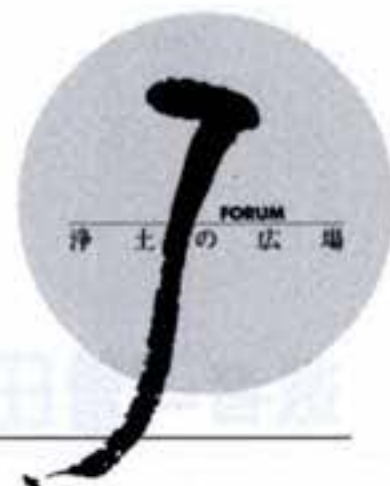
鈴木真理子

拭き残せしガラスの塵に初日影

一丁田美恵

終便の汽笛短し初しぐれ

中村 和徳



奥鈴自由題

兼題
(季語ではありません)

浄土誌上句会のお知らせ

白魚

白魚の目に合い箸をためらいぬ

増田 信子

白魚とび利尻富士見て耀けり

工藤 浄真

川淵に垂れて白魚漁の網

金谷 友江

白魚の億のみじろぐ光かな

青山 亜子

まづ洗ふ手や白魚は筑の上

内藤 隼人

白魚のはらわたまでもひかりなり

十条 苑を

白魚の誕生日ごと掬わるる

目黒 裕

白魚の寄りて光りし水面かな

坂下 優子

草の芽

草の芽きりりと陽に満ち映ゆるなり

工藤 浄真

石垣のかげに草の芽顔のぞく

中島富士子

水音や草の芽草になるところ

和田 仁

締切・二〇〇七年四月二十日

発表・『浄土』二〇〇七年六月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

老人に草の芽生うて眠りけり

目黒 裕

髪切れば遠き家路や名草の芽

坂下 優子

草の芽やふつくら炊けた朝御飯

十条 苑を

草の芽嗅ぐ鉄路に耳をつけながら

桜木 勝之

岩場より生えて草の芽やわらかき

山口 信子

ここちよき風遊ばせて名草の芽

井村 善也

自由題

初晴や夢の天地を懐きをり

工藤 浄真

山吹や親しみやすき道祖神

中島富士子

百八知恩の響き蔵の鐘

飯島 英徳

蠟梅の城跡公園巡りけり

金谷 友江

貝潜む層をゆらりと春の水

坂下 優子

三椏の花わらわらと午後が来て

和田 仁

春光の先頭を行く都電かな

大森 栞

故郷に残せし墓地や山眠る

東 保

初日記先ず晴天と書きにけり

中村 真一

老いし身を大事に生きん初明かり

西井 正

焚き火の輪子等流水を集めきぬ

谷 しげる

さっちゃんねる

39 かい目

かまち♡ひろう



編集後記

新芽ふく念々歩々唱々

岱潤

昨年ご講演を頂いた上田紀行先生は、以前スリランカの悪魔祓いを調査したことがあるようだ。病氣直しに悪魔祓いなど聴くと、思わず前時代的なことと片づけてしまいそうになるが、その報告書を読むと思わず唸ってしまう。悪魔祓いで直す病氣とは、病院に行っても病名が見つからないような、ただだるいとか、やる気がないとかという病氣で、現代ではすぐ精神科に行けということになるが、スリランカでは、シャーマンを呼び、その人の家族、親戚、近所の人など百人近くが集まって、一晚中歌い、踊り、そして明け方シャーマンの代表がその人に取り

憑く悪魔と話し合い、出ていってもらおうという。そして今度はみんなでそれを喜び漫才などお笑いが始まり、その人も思わず笑い出すという儀式だという。つまり、悪魔は孤独な人に取り憑くので、その人をもう一度みんなの輪の中に戻してあげればいいのだという。

現代の日本では、すぐに精神科に行き、そして病人として扱い、薬付けの日々が始まる。回りからは隔絶し、余計に孤立を深めてゆく。

はたしてどちらが人間を見つめているだろうか、その人の救いになっているだろうか、人類の進歩って何だったのだろうか。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
肱博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十三巻四月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十九年 三月二十日

発行

平成十九年 四月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

※シネマ随想はお休みさせていただきます。



法然上人鑽仰会の



※額装寸法47×59cm



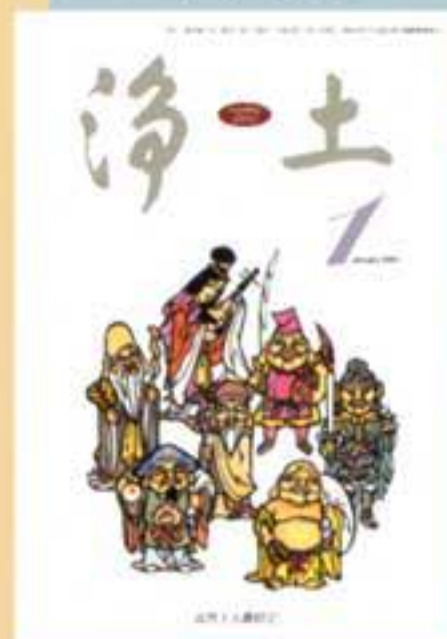
選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036